

The space design for "Preservation"
-Through the two competitions-

Department of Infrastructure Systems Engineering

1065012

Yuji UMEBARA

Abstract

Isamu YOSHII memorial hall opened to Kahoku-cho of Kochi Prefecture on May 31, 2003. It is the building that commemorated the poet Isamu YOSHII who is related to this town. The design of this memorial hall was one in the enforcement project in our laboratory. A precious experience was obtained by looks at process in which construction is actually done from a basic design. This experience is the opportunity of this master design. At this memorial hall, collection and exhibition of the distinguished services and memory of the Isamu YOSHII is calmly carried out in surrounding beautiful scenery. I thought that the theme of this master design was not exhibition space but collection / preservation space. The reason is that the meaning of this memorial hall is to sew up predecessors' distinguished services and memory firmly on site. Therefore, the space design for "preservation" is carried out in this master design. As a method of attaining the purpose, it participated in two design competitions. It is the design competition of the "Kumagusu Minakata research institute" and the "Mie Kumano Kodo center." The following keywords were proposed in two design competitions.

Kumagusu Minakata research institute competition

- 1.A gesture of embracing and enclosing
- 2.Architecture open for the town
- 3.Exhibition space with the effect greatest by the minimum

Kumano Kodo center competition

- 1.Architecture hides into woods
- 2.A shelter of sunshine filtering through foliage
- 3.Exhibition space like the excavation site of ruins

It is relation between core of concrete and wood construction that thought in common in two design competitions. Core of concrete is protected from outside environment by wood construction. In other words time of the collected thing is filtered. Isn't it that it is most important how the relation between the collected thing and the shelter that covers it is built in construction that gives top priority to preservation ? The construction space for "preservation" must be designed so that the nature time when place and construction / collection things differ may be sewn up.

修士設計要旨

「保存」のための空間設計

～ 2つの設計競技を通じて～

社会システム工学コース 1065012

梅原 佑司

目的・構成

2003年5月31日、高知県香美郡香北町猪野々に香北町立吉井勇記念館が開館した。この記念館は同町ゆかりの歌人、吉井勇が猪野々で隠棲した時代にスポットを当てた記念館であり、研究室における実施プロジェクトの一つであった。この記念館の基本構想から実際に建築が出来上がるまでを見ることができた貴重な体験を、自分の記憶だけにとどめず、修士設計を始めるにあたってのきっかけにできないかと考えた。吉井勇記念館では、周辺の美しい棚田の風景の中に吉井勇の隠棲時代の記憶が静かに収蔵され、展示されている。この吉井勇記念館をきっかけとしてテーマを定めるとすれば、それは展示空間ではなく、収蔵・保存空間であるといえる。この記念館を根底から支えるものはその収蔵・保存空間であり、決して展示空間ではない。展示空間だけならいつでもどこでも可能なはずである。その場所に先人の功績と記憶をしっかりと縫い合わせておくことによって始めて、この建築が成立するのだと考えられるからである。本修士設計では、「保存」のための空間とはどのようにあるべきなのかを提案・設計することを目的としている。

本修士設計は以下のような構成となっている。

第1章では「南方熊楠研究所（仮称）設計提案競技」において、応募要項を整理し、設計競技の主旨や基本構想、基本計画を把握し、現況敷地からもたらされる様々な条件から設計における方向性を決定する。その後に設計プロセス、応募案を紹介するとともにこの設計競技における優秀作との比較検討を行なっている。第2章の「三重県熊野古道センター（仮称）基本設計公募型プロポーザル」においても同様に、応募要項の整理、設計競技の主旨や基本構想、基本計画の把握、現況敷地からもたらされる様々な条件から設計における方向性の決定を行なっている。その後に設計プロセス、応募案を紹介するとともにこの設計競技においても優秀作との比較検討を行なった。第3章において2つの設計競技を通じて見えてきた「保存」と建築空間について述べ、本修士設計をまとめた。

南方熊楠研究所（仮称）設計提案競技 概要

南方熊楠旧邸（以下、南方邸）並びに邸内に遺された研究資料等を恒久的に保存し、南方熊楠に関する研究を推進するとともにその成果を国内外に向けて発信するための施設として、南方邸とその隣接地に南方熊楠研究所(仮称)を設置する。

計画条件

- (1) 所在 田辺市中屋敷町 3 6 番地
- (2) 敷地 8 4 1 . 4 7 m² (実測)
- (3) 用途等 第 1 種住居地域 建蔽率 6 0 % 容積率 2 0 0 %
- (4) 延べ床面積 約 7 5 0 m²程度
- (5) 予定工事費 3 . 2 億円以内 (備品等を除く)
- (6) 構造及び階数 木造、又は木材を多用すること
(収蔵庫については R C 構造とする)
階数は 2 階建てとし、地階は設けないこと。

コンセプト

・ 緑に囲まれた研究所

ここで提案する建築が、楠や今ある緑を避けるように建つのもなく、また建築がそれらの緑を無視して建つでもない、緑に対して対等な関係を持てるようなものでありたいと考え、建物を敷地の真ん中にできるだけコンパクトに配置した。収蔵庫 = 蔵のボリュームをその他の機能がぐるっと取り囲み、さらにその外側を緑が取り囲む層構造を成している。建物を 3 6 0 ° 取り囲む緑は、隣地に対して緩衝領域としての緑をつくり出すだけでなく、様々な種類の植物が発見できる、まるで植物園のような南方邸との調和を生み出している。また、町並みへ緑を提供すると同時に研究所からは 3 6 0 度どこからでも緑が見えるような構成になっている。

・ 町に開かれた研究所

収蔵庫という大きく閉じたボリュームを取り囲む空間は木造で開放的につくられ、この建築において大きな収蔵庫のボリュームがファサードとなって立ち上がることはない。研究所で顕彰保存活動を行う人や閲覧室で熊楠の資料を見ている人、セミナールームを使っている人、屋外テラスでくつろぐ人などの様子が、周りの緑や木製ルーバーで視線が緩やかに繋がれながら、外部から伺い知ることが出来る、そのような町に対して開かれた研究所にすることを提案する。

・ 最小にして最大の展示ができる研究所

熊楠が生涯を費やして蓄積された書物、標本、それらすべてが収められている収蔵庫一蔵は、この建築を支える象徴的な要素であると同時に、いわば熊楠の思想、記憶など、すべてが凝縮された熊楠を知る最高の要素でもある。蔵の内部を覗き見ることが可能な孔をいくつか設け、膨大な熊楠の研究資料が収蔵保存されている状態そのものを常設的な簡易展示とすることを提案する。

(5) 周辺の状況：尾鷲市向井地区は、JR尾鷲駅から約3.5km、大曾根駅から約0.5kmで、熊野古道八鬼山の入り口に近く、古道の拠点として情報発信できる位置にあり、国道42号線から約3km程度（大曾根方面）東側に入り込んだ場所で、景色、環境面で優れた場所である。

(6) 延床面積：約2,200m²～2,400m²程度

(7) 構造：関係法令及び構造的に可能な限り木造とする。

コンセプト

・森の中に忍ばされたセンター

ここで提案する建築が緑の中に静かに忍ばされたものであるようにと考え、求められる機能をコンパクトにまとめ、敷地南の緩やかな傾斜地に配置している。コンパクトにまとめられた建築の周囲は憩いの森が整備され、海からの潮風を憩いの森でフィルターにかけている。ここを訪れる人はまず憩いの森を体験し、その奥に忍ばされたセンターに出会う。斜面に沿い、プロポーションを低く押さえられた建築はシェルターとしての屋根の存在のみを意識させ、奥に広がる棚田の風景や山の稜線へ視線をつなく。建築を忍ばせるという周囲の自然に対して同化していくようなセンターのあり方を提案する。

・木漏れ日のシェルターで覆われたセンター

物を収蔵しておくための空間は緩やかな斜面に階段状に埋蔵されている。その堅く造られたRCのコアは熊野古道の黒雲母花崗岩で被覆され、あたかもこの土地に出現した遺跡のように力強い構成を持つよう計画されている。この石による構築的な遺跡を木造のシェルターによって覆う、それは発掘現場における遺跡と覆屋の関係そのものである。守られるべき収蔵庫＝遺跡は大きな覆屋によって、外部環境からの影響を和らげると共に収蔵庫のボリュームをその建築内に閉じこめ、外部の美しい風景に対して開放的につくることできる。遺跡を覆うシェルターは木造のトラスで組まれた空間を持つ屋根である。ボリュームを持ったそのシェルターは木製ルーバーで被覆され、太陽の光を建築内に木漏れ日を落とす装置でもある。ルーバーで濾過された光はそれぞれの機能スペースを明るく保ち、その光は展示空間にまで落ちる。この木漏れ日のシェルターに覆われたセンターを提案する。

・遺跡の発掘現場のような展示空間

展示空間は黒雲母花崗岩でつくられた遺跡の発掘現場のようなものである。上部にはブリッジでつながれたフロアが存在し吹き抜けが多くつくられる。ロビースペースや古道情報サービススペースから展示空間の“堀”を見ることができ、同時に上部の光が展示空間に降り注ぐようになっている。展示空間から熊野古道に関係する収蔵物が覗けるようになっており、窓のむこうに熊野古道の物質としての情報を発見することができる。

